



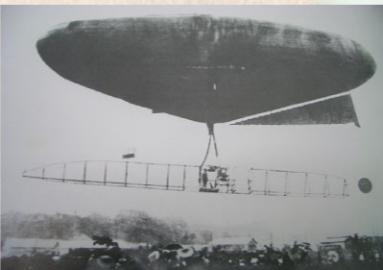
大崎は、日本初の「飛行船」が生まれ、飛んだまち。

私達のまち「大崎」の歴史の中に埋もれた興味深い事柄や、ゆかりのストーリーを訪ねる「大崎今昔物語」。

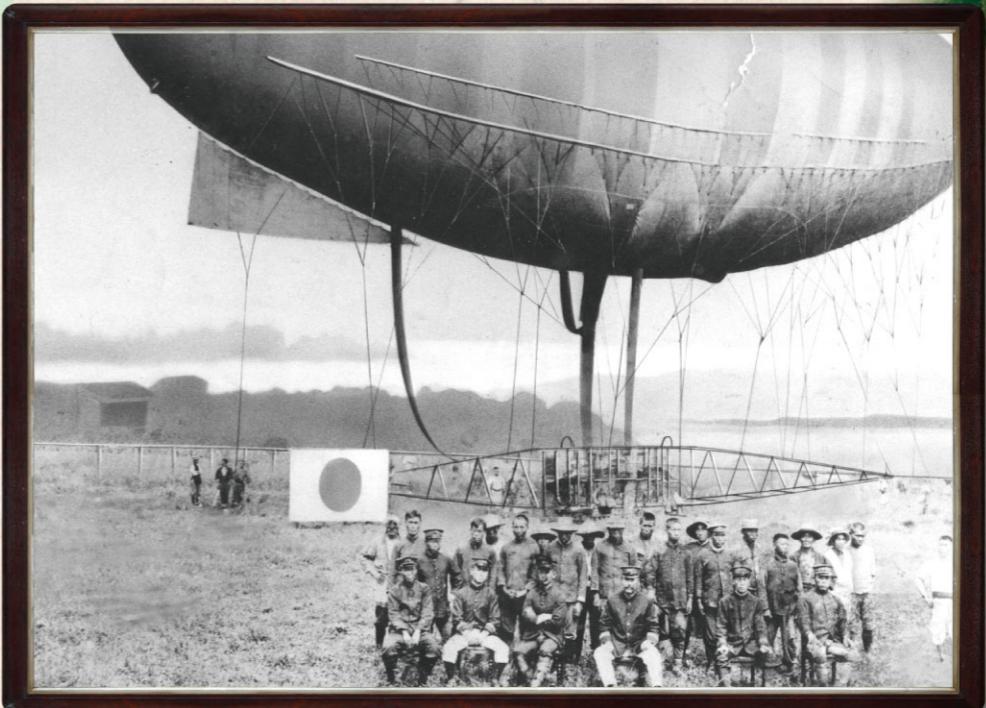
過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNAの一端が、少しでも明らかになればと願い、

一話完結のシリーズとして取り上げていきます。その第一話は、

大崎から日本初の「飛行船」が飛んだ話。“ものづくりのまち”大崎のルーツはここにもありました。



日本の飛行船の父、(株)気球製作所創業者・山田猪三郎氏 います。



大崎からのテスト飛行に成功した「山田式一号飛行船」や、東京上空を初めて一周した「山田式三号飛行船」の格納庫がある大崎の(株)気球製作所(左上写真)。当時はすでに、係留気球がアドバルーンとしての役割を担っていたことが伺えます。また右ページ写真は東京上空を一周した三号機。双発150馬力エンジンを積み、大崎から日比谷、愛宕山へと周り大崎に帰還。約20kmの飛行に成功し、本格的な飛行船実用化の時代を開きました。



(株)気球製作所は、明治40年、工場拡張のため港区高輪から大崎駅東口へ移転。この地で飛行船をはじめ広告用係留気球などの多くの気球の開発製造に注力。その後昭和9年、山手通りの拡幅計画に伴い現在地の北糀谷に移転、操業を続けています。

大田区北糀谷にある(株)気球製作所では、気象観測用気球の高度3万m超での強度維持に向けて、1日1個、破裂するまで膨らませる試験を敢行。世界の気象予報システム用気球としての技術研鑽に努めています。



象観測用機器を上げるために気球の製造を通じ、「社会に役立つ気球づくり」を通じ、飛行船づくりで世の役に立つことを願った猪三郎氏の曾孫にあたる豊間清さん(写真)。歴史に名を残すものづくり企業を引き継ぐ豊間さん、「社会に役立つ気球づくり」と語っています。

「社会に役立つ気球づくり」を通じ、飛行船づくりで世の役に立つことを願った猪三郎氏の曾孫にあたる豊間清さん(写真)。歴史に名を残すものづくり企業を引き継ぐ豊間さん、「社会に役立つ気球づくり」と語っています。



社長の豊間 清さん

“ものづくりのまち大崎”の先駆けともなった日本初の飛行船製造。第1号機は明治43年初めて大崎から“未来”へと飛翔。のちに気象観測用気球へ発展、世界の空から地球を見守り続けます。

ルーツは大崎駅東口に。日本の飛行船生みの親、山田猪三郎氏創設の(株)気球製作所。

ものづくりのまちとして大崎、そのルーツは、明治時代から富国日本の根幹をなす製造業の地として発展し始めた歴史とロケーションにあります。目黒川に沿って広がる河畔の地に、将来を賭して建つ先端技術の製造拠点群。日本初の飛行船を生み出した(株)気球製作所もその一つ。創業者山田猪三郎氏率いる精銳の技術者集団は、現在の大崎駅東口の地に工場を構え、ここから明治43年「山田式三号飛行船」のテスト飛行を成功させたのでした。大崎から駒場までの7km。これが日本人の作った飛行船の飛行記録第1号でした。

飛行船から、世界の空に飛び気象観測用気球へ。

大崎からの飛行船第1号機の飛行に続き、さりに人が操縦する乗り物が本格的に東京の空を飛んだのは、この時が初めてとなりました。先端技術で日本振興の役に立ちたいと願い、偉業を成し遂げた明治の賢人山田猪三郎氏の意を継ぐように、(株)気球製作所はその後、移転先の大田区蒲田(北糀谷)での操業を通じて飛行船の“原点”でもある多くの気球の開発と製造に注力、特に気象観測の分野から社会貢献を果たしています。これまで、ラジオソノンデと呼ばれる気